

垂水の

秋

の伝統行事

垂水郷土芸能保存会



垂水区
区長 山田 恒子

このたび、区内の伝統的な行事・文化・芸能の保存・伝承を目的とした垂水郷土芸能保存会の活動におきまして、「垂水の秋の伝統行事」を発刊されますことを大変うれしく思います。

垂水区では毎年10月に各地で秋祭りが行われ、まちが賑わいます。

各地の秋祭りでは、五穀豊穡、子孫繁栄、村内安全等を祝って獅子舞や神相撲が奉納され、布団太鼓が巡行されます。こうした秋祭りにおける行事は、垂水のまちの伝統行事として、古くから親しまれています。

本誌では、垂水の秋祭りにおける伝統行事の現在の姿を捉えるとともに、時代の変遷とともにこれら

の行事がどのように移り変わり、継承されてきたかをお伝えできるものとなっています。

こうした各地の特色ある秋の伝統行事を克明に記録し、後世に継承する本誌の発刊は、誠に意義深いことであり、垂水郷土芸能保存会の皆さんをはじめ、作成にあたって中心的な役割を果たしていただいた各地の伝統行事に携わる皆さんのご尽力に改めて感謝申し上げます。

この「垂水の秋の伝統行事」を読まれた全ての方々が、地域の歴史や伝統文化を再認識し、今まで以上に垂水への愛着と誇りを持っていただくことができるよう心から祈念いたします。

皆様方にはご清祥の毎日とお慶び申し上げます。このたび、垂水郷土芸能保存会において、垂水区

の伝統行事の保存と継承のため、垂水の秋の伝統行事をまとめた冊子を作成することとなりました。

作成するにあたり、各地域の皆様が秋の伝統行事に関する資料をご提供いただくなど、多くのご協力いただきました。

おかげさまで、垂水郷土芸能保存会としての冊子ができました。

冊子の作成に関係された皆様方のご協力に感謝申し上げます。

本冊子が、今後、伝統行事の継承に役立つことを願い、ご挨拶とさせていただきます。



垂水郷土芸能保存会
会長 吉川 純行

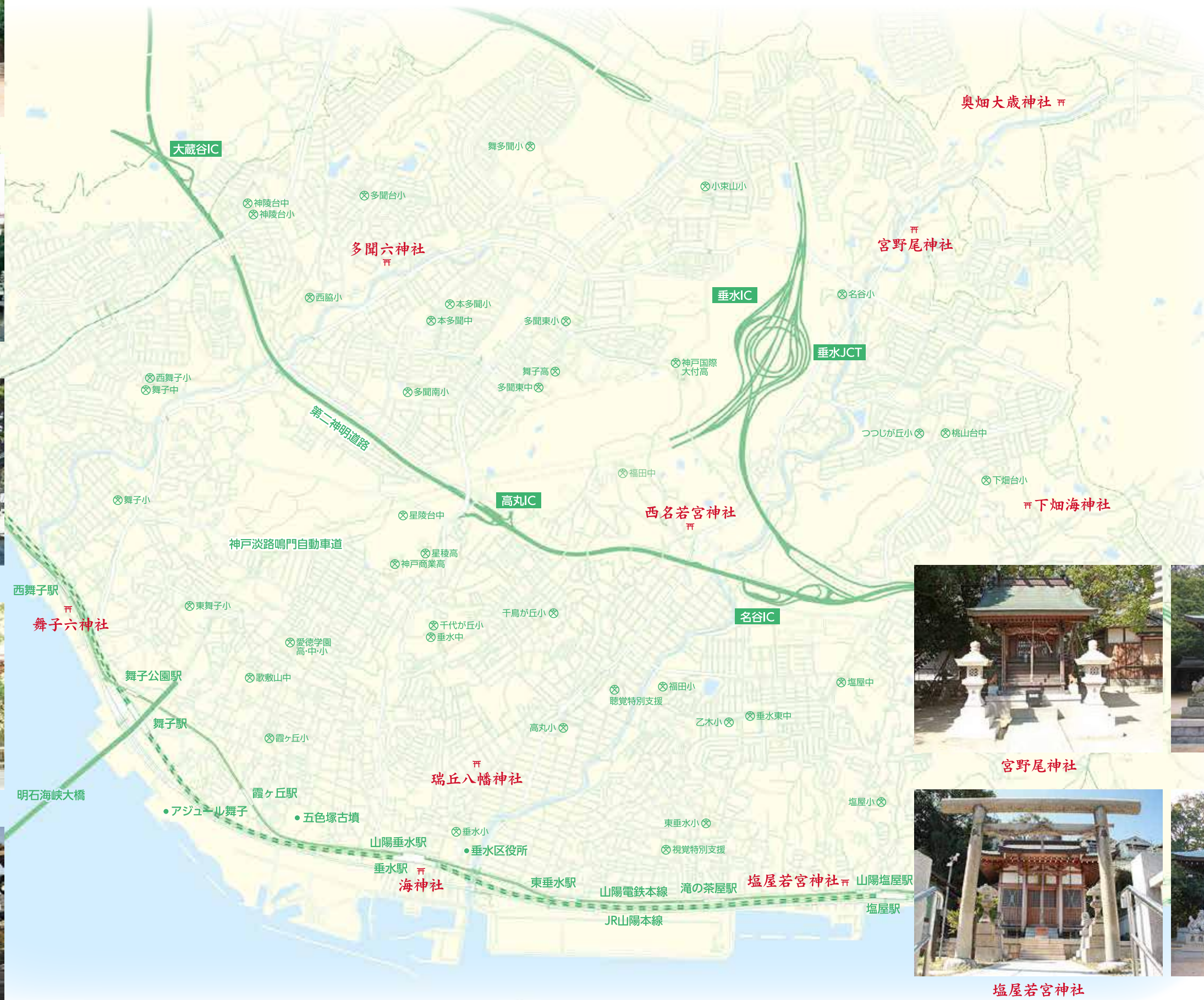
目次

「ごあいさつ」…………… 1
垂水の神社と秋の伝統行事…………… 3
海神社の秋祭り…………… 5
下畑海神社の秋祭り…………… 7
塩屋若宮神社の秋祭り…………… 9
奥畑大歳神社の秋祭り…………… 11

宮野尾神社の秋祭り…………… 13
瑞丘八幡神社の秋祭り…………… 15
多聞六神社の秋祭り…………… 17
舞子六神社の秋祭り…………… 19
西名若宮神社の獅子舞…………… 21
ご協力者・参考文献・用語集…………… 22

垂水の神社と秋の伝統行事

垂水区では、毎年10月、区内各地の神社を中心に、五穀豊穰、子孫繁栄、村内安全等を祈念して秋祭りが開催される。
この秋祭りでは、垂水区に古くから伝えられてきた伝統行事である獅子舞や神相撲が奉納され、布団太鼓が巡行する。



多聞六神社



西名若宮神社



舞子六神社



瑞丘八幡神社



海神社



宮野尾神社



奥畑大歳神社



塩屋若宮神社



下畑海神社

海神社の秋祭り



- 神輿唄
- 一 番 目
祝いーめでたの 若松様よ
枝も栄える 葉も茂る
千代の神いさめ
 - 二 番 目
めでたーめでたのお宮の松は
枝に枝さす 苔がむす
千代の神いさめ
 - 三 番 目
見ればー美しいお宮の庭よ
船が入る 海の上
千代の神いさめ
 - 四 番 目
波もー静かに御代治まりて
船で御幸の 神遊び
千代の神いさめ
 - 五 番 目
御代はー治まる 思うことかた
末は鶴亀 五葉の松
千代の神おさめ

海神社と氏子

海神社は神戸市垂水区宮本町5番1号にある。祭神は底津綿津見神・中津綿津見神・上津綿津見神、大日靈貴尊の四柱で、古来から明石海峡の守り神として崇敬されている。

現在の氏子地は西垂水・東垂水・東高丸・塩屋・名谷(奥畑)・中山・滑・東名・西名)の各地区である。

秋祭り

10月10日・11日・12日に行われ、10日は西垂水・東高丸・塩屋でそれぞれの布団太鼓が巡行する。



11日は東垂水の布団太鼓巡行も始まり、各氏子地の布団太鼓の宮入が行われる。12日神幸式(海上渡御)から13日の後宴祭に移る。神輿のかき番は①西垂水②東高丸③東垂水④塩屋の氏子地区順で行われる。

かき番は9月下旬から10月5日頃の間に神輿の飾り付けを行い準備する。船の準備は8月下旬の守衛会で地区割り当てが決まる。役割は次の通りである。猿田彦(鼻高さんともよばれ、かき番地区が受け持つ)、太刀持ち(稚児とも呼ばれかき番地区の子供が受け持つ)、その他、道具持ちは宮総代や役員が受け持つ。

午前8時30分…出御祭
9時30分…神輿が興丁(よてい)に渡され渡御に移る。

その時、神輿唄が唄われる。唄い上げは、二人が扇子を額にかざして唄い、唄い上げ終了後「ソラーツ」で興丁全員が立ち上がる。両手を頭上で左右に振りながら手拍子で以降を唄う。唄い終わると「ソレサ」で神輿を差し上げる。拝殿前で番、二番、三番を唄い上げる。

行列は切麻・柗持・猿田彦・神輿・宮司・稚児・道具(赤提灯・金幣・紅旗)持ちと続く。

指揮者が拍子木を2回打つ。次にソッコデシヨ(子供のことをいう)2人が「ソコーデシヨ」と声をかけ、興丁が「ソレサー」で外側の手を横に出す。「ヨイトナ」で神輿を下ろす。

中鳥居前で二番を唄い上げたから神輿を肩に担ぐ。浜鳥居から垂水漁港まで練る。道中唄い上げは一番から三番いずれでもよい。

10時30分垂水漁港の御座船が停泊しているところで、四番を唄い上げ、差し上げたまま御座船に神輿を移す。

海上渡御

渡御は、猿田彦を乗せた船が先導し、後に御座船、道具類を乗せた船が続く。守護船が加わって20艘ぐらいいなる。乗船者は宮司・禰宜(ねぎ)・太刀持ち・宮総代・興丁で守衛は西垂水・東垂水・塩屋の漁師が行う。それぞれの船は海神社の幟(のぼり)とともに大漁旗や吹き流しが翻っている。御座船は鳳凰を形どっている。

湾内を右まわりに3回まわった後、西に向かう。昔は舞子まで行ったが、今は近くにお旅所がある。東は塩屋漁港にお旅所がある。お祓いを船の中で行い、神酒(みき)と米を海に入れる。この間若衆船が太鼓を叩いて御座船の周囲をまわっている。このち須磨沖まで運行する。

午後1時に御座船が帰港する。先に帰港している興丁が神輿を迎え四番を唄い上げる。その後垂水駅前商店街界隈を練り午後4時30分頃に宮入をしたあと、中鳥居前で二番を唄い上げ拝殿前まで担ぐ。拝殿前で一番から三番を唄い上げる。次に8人の唄い上げが5番を唄う。

最後にソッコデシヨが「オーサマシヨ」と声をかけ、指揮者が「ウーチマシヨ、シャンシャン、イオーテシャンノ、オシャンノシャンノ、シャントセー」と興丁全員で囃して終わる。その後、還御祭を行い、午後5時ごろ海上渡御は終わる。

動画「垂水海神社 海上渡御ふとん太鼓巡行」



動画「東垂水・西垂水 布団太鼓練り合わせ」



下畑海神社の秋祭り



秋祭り

下畑海神社では、子どもの健やかな成長と五穀豊穡を祝って、「奉納神相撲」が行われる。垂水区宮本町海神社の祭日と同じ日に行われていたが、現在では、平成10年に施行されたハッピーマンデー制度（「国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律」）により、体育の日が10月の第2月曜になったことあわせて、体育の日の前日と前々日の土日に行われている。以前は青年会が中心となっていて行われていたが、現在は下畑町会が行っている。一時、少子化により力士不足に陥ったが、下畑独特の伝統を守りながらも時代に合わせた変革により、大相撲の佐渡ヶ嶽部屋の協力が得られ、地域に開かれた伝統行事として多くの地域住民に親しまれている。

神相撲

9月下旬頃から下畑町会の有志12、13人が集まり下畑海神社境内中央にある土俵を整備する。土俵づくりと言われ、以前は秋祭りのたびに設け、崩していたが、現在では四本柱と呼ばれる柱も含めて常設されている。

神相撲奉納者の有資格者は、旧下畑町86世帯の親族等の長男とされ、3年参加することができ、行司をつとめると役割みとなる。

なお長男だけで人数がそろわないときは次男も当たる。

人選は下畑町会役員によって決められる。四股名はその家で代々受け継がれた名が多く若竹・桐ノ戸・和昇・嶋勇などの名もある。土俵の東と西の溜まりに筵（むしろ）が敷かれ、力士が3人ずつ座る。

行事の所作のあと、力士の土俵入りが行われる。

行司は盛土に刺してあった幣（へい）を持ち、呼び出しをする。東側を「カタヤ・・・」と呼び、西側を「コナタ・・・」と呼ぶ。呼ばれた力士は土俵に上がり中腰となり、一礼二拍して両手を開く。土俵中央に進み、取組み式を行う。取組みは大関・関脇・小結同士が行い、勝負は2回、3回行う。一通り取り終わると行司は未広に御花（半紙に10円、50円を入れて四角に包み水引きをかける）を載せて正面に一礼して東の溜まりへ、次は西の溜まりへ配り、最後は未広に載せた正面に一礼して元にもどす。これは行司に配られたもの。これを2度繰り返して行い最後にもう一度取組みを行う。

赤子ころがし

神相撲の後、元気な子供に育つようにと申し出があれば1歳半ぐらいまでの乳児に赤禪（あかふんどし）をつけて抱き土俵の真ん中



に寝かせ、腹に土をかぶせる「赤子ころがし」が行われる。昔、青年相撲をしていたころは自分の身近な立場の人（健康で両親健在）に前日頼んで、してもらったという。平成24年度より、大相撲の佐渡ヶ嶽部屋の力士を招いて行っている。戦前までは神相撲の後の青年相撲が盛んで、30歳前後の人が遠方から下畑まで来て取っていた。現在は、下畑台小学校や桃山台中学校から参加者を募り、奉納神相撲のあとにイベント（子ども）相撲として土俵を開放している。

子供神輿

青年相撲に代わるものとして昭和35年京都から買入れ、神輿唄は宮本町海神社の神輿唄を習って子供神輿の巡行が行われるようになった。

以前は祭日の初日に公会堂西隣の神輿庫から神輿を出し、午後1時ごろから地区を練り、塩屋への道を大谷の四辻（現在の大谷交差点）の所まで下り、地区へ帰ってからバス道を下畑上口まで進み、地区の中を練って公会堂まで帰ってきた。そして、二日目の朝に神輿を庫から出し、下畑海神社の拝殿前に置いていたそうだ。

現在は、地域の子どもも交えながら消防団員の有志が午前中は桃山台周辺を練り、奉納神相撲のあと、午後からは下畑町内を練る。

午前中、下畑海神社へと戻った神輿は、神輿を先頭に神・猿田彦・宮司・道具持ちの順で右回りに進み階段を降りお旅所へ向かう。お旅所は本願さん（本願神社）と天高さん（乙姫大明神）の2箇所である。「ソコデショ ヨイトナ」の掛け声で神輿をおろし、それぞれ役員が参拝しお神酒を頂いている間近くで待機し、担ぐとき神輿唄の1番と2番を交互に唄って唄い上げをする。

お旅がすむと下畑海神社へ帰り、土俵の周りを右回りに2回まわる。3度目に階段を降り下の鳥居まで行って、再び上がり、拝殿の前に置く。道具類は本殿に置く。古くから行われていたならわしであったが、不老長寿のご利益があるとして猿田彦（鼻高さん）に跨いでもらう場面がある。近年は現代的なものとなり、誰でも気軽に横になつて楽しんでる。相撲終了後3時過ぎから神輿だけ右回りにまわって鳥居をくぐりお旅所や他2、3箇所休みながら初日と同様に地区を練る。午後6時30分頃まで練り、神輿庫へ収めて終わる。

動画
「もはたの秋祭り」下畑海神社



塩屋若宮神社の秋祭り



塩屋若宮神社氏子地

塩屋若宮神社は、神戸市垂水区塩屋町4丁目14番9号にある。旧播磨と旧摂津の国境の地旧塩屋村では、古くから顕宗天皇、仁賢天皇、安閑天皇を御祭神として、塩屋の氏神様として崇敬してきた。明治初期から中期の山陽鉄道(現JR)の鉄道布設の折、東畑の岬(境川の少し西)にあった梅ヶ鼻天神が移築され、現在の規模になった。

また明治初期には旧塩屋村として海神社の氏子となり、海神社の神事に参加するようになった。秋祭りは、10月10日に行われる。

塩屋の獅子舞

節句祭と獅子祭りに獅子を舞ったという。明治35年ぐらいまで、9月9日の節句祭に青年団が塩屋の家々を1軒ずつ65軒ぐらいまわった。二人継ぎ、三人継ぎの舞い方もあった。笛はなかったが、太鼓を叩いた。ジエームス山に住んでいた英国人と呼ばれて舞いに行ったこともあるという。

また大正10年ごろ10月11日、海神社の秋祭りに徴兵検査に当たる20歳の青年を迎えて5〜6人が神社境内や60軒〜70軒あった塩屋の家々の神棚の所で舞ったという。昔はひよっとこの面をかぶったり、ササラを使う獅子があり、よく舞ったという。昭和5年ごろ大阪から新しく獅子頭を購入した。昭和43年ごろ布団太鼓の売却と同時に獅子舞も一度消滅したが平成13年夏「獅子頭」が、塩屋公民館の倉庫整理中に発見された。

見つけ出された時は、カビやキズで激しく傷んでいたが、もう一度獅子舞を復活させようという地域の要望に対し、塩屋の各団体の協力により修復され、平成15年に復活した。平成17年に獅子は青年会に引き継がれ、新たに獅子頭を全面修復して現在の毛獅子になった。年配者から当時の舞い方を教わりながら若衆達で新しい舞い方も取り入れた。現在は、秋祭りの他に近隣地域のイベントやお正月にも獅子舞を舞っている。

塩屋の布団太鼓

明治38年頃に東垂水から譲り受け、海神社秋祭りに練った。当時は西は海神社、東は現在の須磨駅付近まで国道を練ったそうである。昭和30年代中頃、国道2号線の交通量増加などの諸事情により海神社への宮入はなくなった。その後5年ほど塩屋の浜に11日12日と布団太鼓を飾っていたが昭和43年頃に売却した。平成20年、加古郡播磨町本荘地区より布団太鼓を購入した。平成21年より布団太鼓巡行が復活した。

動画「塩屋布団太鼓巡行・宮入」



奥畑大歳神社の秋祭り



奥畑大歳神社と氏子

奥畑地区は、ほかの名谷町の各地区と同様垂水区宮本町の海神社の氏子地であり、地区内には海神社の兼務社の大歳神社がある。

秋祭り

現在は10月の第2日曜日(体育の日の前日)に行く。かつては10月8日や10日に行っていたときがあった。

宵宮がその前日、午後7時すぎ神社からお旅所まで子供を中心としてひき提灯が行われる。境内では獅子舞を交代で舞う。

本宮は午後2時ごろから海神社の宮司により神事が行われる。その後、子供神輿に御神体を移し、3時前『役付帳』によって地区の人びとに祭具が渡され神幸式の準備が整う。

3時ごろから、拝殿前の石畳の参道に筵を敷いて、獅子舞が舞われる。獅子舞は川下の中山地区のものと同様に似ている。獅子舞のだんじりに載せた太鼓を叩くのに合わせ、センマ(ヒョットコ)オタフクがそ



の裾をさばいて舞う。

獅子舞が終われば、神幸式の列がお旅所へ向かう。獅子舞のだんじり・子供神輿も同道する。かつては大人神輿が出されていたが、第2次世界大戦後に子供神輿にかわった。かつては、大人神輿を庫に保管していたが、現在は処分されている。

3時30分ごろ、子供神輿がお旅所に到達する。お旅所には、鳥居のすぐ東の所に約1メートルの方形に筵を立てて祭場とする。この前に神輿を置き、宮司によりお祓いを受けたのち、獅子舞を舞う。お旅所では団子や二人継ぎなどを行う。4時すぎに獅子舞を終わ、神輿唄を唄う。この神輿唄は海神社と同じ神輿唄であるが、節回しが少し異なるようだ。

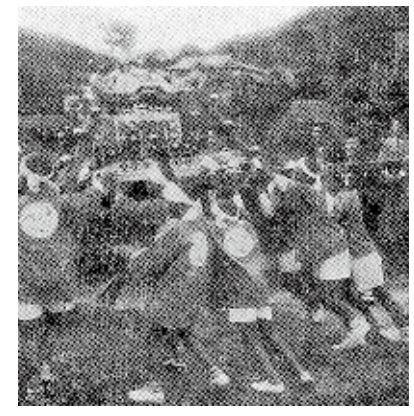
その後、神社へと戻る。戻ってからは、4時30分ごろから直会(なおらい)が始まる。直会では、甘酒と餅と玄米を混ぜたシトギなどをまわす。なお、シトギは春祭りと同様、檉の箆に巻いて取る。4時45分ごろ直会を終わる。

本宮の翌日には、新旧のコヤドがそろって神幸式の道具を引き継ぐ。午後は旧のコヤドが、供えてあった餅を切り(ゴク切りという)配る。

奥畑地区では、獅子を舞うのはかつては20歳前後の地域の長男に限られていたが、現在は地域の若手の男性が担っている。

獅子舞の練習は本宮の10日前頃から若手の男性を中心に行われている。

子供神輿の担ぎ手は奥畑地域の子供たちだけでなく、近隣の高層マンションや菅の台などの新興住宅団地からも募っている。



動画「奥畑大歳神社 獅子舞」



宮野尾神社の秋祭り



秋祭り

名谷町中山地区では、かつては毎年10月11日の夜に獅子舞を舞い、12日には海神社の行事に参加していたが、現在では、体育の日の前日の日曜日に秋祭りの行事を行っている。

その年の行事のお世話をする人を明神講のミヤコ(宮子)といい、かつてはミヤコ(宮子)の当番のうち1軒を宿として獅子舞の準備・練習にかかっていた。その年にミヤコ(宮子)に入る人をイリ(入り)、卒業する人をノキ(退き)という。

現在の秋祭りでは、前日の午後から、宿に当番が集まり、獅子舞の道具を整理・補修したり、宮野尾神社境内の準備をする。秋祭りの当日は、午前中に宮野尾神社に明神講のメンバーが集合し、飲食をともにする。午後4時ごろから境内で獅子舞が舞われる。はじめに、ひよっとこお多福が出て、太鼓と唄に合わせて踊る。これをセンマと呼び、かつては明神講に入りたての2人が選ばれ踊っていたが、現在では中山地域の子ども(中学

生)が担っており、2週間程前から公民館で練習をする。ひよっとこはスリザサラを、お多福は団扇としゃもじを持つ。太鼓は早いリズムで、それに合わせて前進・後退を繰り返す。前進の時にはスリザサラを鳴らしたり、団扇であおぐ恰好をし、後退のときは前を向いたまま手を背中にまわしてさがる。なお、このセンマのときに唄われるのは、宮入りの唄(1番)・木遣りの前唄・木遣り(1番)の3つで、取り囲んだ宿老たちが唄う。

センマが終わると、獅子が登場する。2人1組で、2組の獅子が交代で舞う。獅子は、かつてはセンマをした者から選ばれていたが、現在では高齢化から新しい舞い手がおらず、毎年協議会の中から選ばれている。センマのときと異なり、ゆつくりとしたリズムの太鼓に合わせて舞う。獅子を舞うあいだ、ひよっとこは獅子の尾持ち、お多福は持っている団扇で獅子をあおぐ恰好をする。また、獅子を舞いはじめたときには次のような囃子言葉(はやしことば)が、周囲の宿老たちによって言われる。

エーライヤツチャエーライヤツチャ
ドライヤツチャノ
中山お獅子はよう使う
マカセマカセヨイヤマカセ
これ以外に、次のような囃子言葉がある。

隣りのばばさんかわらけで
どちらもけがのうてよかつたな
エライヤツチャエライヤツチャ
ドライヤツチャノ

米は安ても獅子や高い
エライヤツチャエライヤツチャ
ドライヤツチャノ
生えかけじゃソラモージャモシヤ

境内での獅子舞が終わると、地区内の全戸をまわっていく。一般の家では荒神祓いを行い、役員の家では宿で舞ったと同様の獅子舞を行う。毎年、境内での舞いを含めて4箇所を舞うことになっている。こうして深夜まで地区内を回った後、神社に戻って行事が終わる。

獅子舞太鼓
(センマとお多福が出る時のたたき方)



(獅子舞が舞う時のたたき方)



神戸の民俗芸能垂水編より

瑞丘八幡神社の秋祭り



秋祭り

西垂水の鎮守である瑞丘八幡神社の秋祭りは、10月10日(宵宮)11日(昼宮)に行われる。

現在は、11日に布団太鼓の宮入、獅子舞奉納、子供神輿渡御が行われる。

西垂水の自棄獅子

少なくとも200年前の文化・文政時代から伝わる芸能で陸の自棄獅子(くがのやけじし)と呼ばれ地域で伝えられ、かつては、陸ノ町青年会が奉仕した。当時は子供が曳くだんじり(中に太鼓だけが入り外から叩く)もあった。

昭和35年に一度途絶えたが、地域の人人々から再開を望む声上がり西垂水の青年達が昔、獅子舞を経験されたお年寄りに願い出て稽古をつけてもらい、平成12年の秋祭りで復活した。

子供神輿

子供神輿は小学生4・5・6年生、80人ほどで担ぐ。以前は下級

生が道具持ちであった。現在は猿田彦と青年会が同行する。お祓いの後、出御の神輿唄をかき上げ、境内を練る。神輿唄は次のとおりである。

瑞丘八幡神社神輿唄

●出御

イーラーターメーターアア
アーアアーノ
ワーカーマアアアアアアアアア
ウーウウ
サアアアアアアアアアアアアア
枝も栄える葉も茂る葉も茂る
千代の神納め

●御旅所

メーターターメーターアアアア
アーアアアガ
カーズカーアアアアアアアアア
アアアア
ナーアアアアアアアアアアアア
鶴は御門に巢を掛ける巢を掛ける

●海神社

メーターターアアアアアアアア
アーアアアアアアアアアアアアア
エーエルーウ

ウーウウ
ミーイーイー ヨーオアア
神は御繁盛民豊か民豊か

●納め

ゴヨーワー オーサーマアアア
アアアアアル
オーモコーオアアアアアアアア
アアアア
カーアアアアアアアアアアアア
末は鶴亀五葉の松五葉の松
千代の神納め

午後2時頃神輿をトラックに載せ、輿丁はバスでまわる。

海神社で神輿を降ろし、輿丁がかき上げる。鳥居の前で宮入をする。拝殿まで進み右回りで神輿を台の上に載せる。神輿の前に酒・米・餅・果物を供え宮司がお祓いする。榊を供えたあと、神輿唄をかき上げる。鳥居を出て、「マカセ」「ヨイヤマカセ」と囃して右回りにまわる。「八幡さんじゃ オー トスーナ」と囃しながら神輿をトラックに載せる。

この後、舞子まで国道を進み、霞ヶ丘からウエステ垂水付近で神

輿を降ろして、垂水駅前商店街界隈を練り瑞丘八幡神社へ帰る。
午後4時40分頃神社に着き、拝殿前で納めの神輿唄を唄う。神輿庫は境内にあるが、神輿は拝殿に飾っている。



動画「西垂水・自棄獅子 瑞丘八幡神社」



多聞六神社の秋祭り



秋祭り

元来、多聞の秋祭りは、農作物の収穫に感謝し、地元の氏神様の御神徳を讃え、五穀豊穡、子孫繁栄、無病息災、村内安全を祈願する行事で、古来より受け継がれてきた獅子舞と子ども神輿が奉納されてきた。

かつては青年会が主体となっていたが、昭和53年に獅子舞等、地域の伝統行事を継承するための多聞保存会ができ、それ以降は保存会が主体となっており、保存会ができる以前は10月8日が宵宮で、9日が昼宮とされていたが、平成22年から宵宮が中止となり、現在では昼宮のみが10月の体育の日に行われている。

かつての昼宮は、「宿」と呼ばれるその年の行事当番の家から太鼓台（だんじり）や六社大明神と書いた幟などを持った行列が木遣（けやり）を唄いながら神社へと向かった。行列が神社に到着した後、「ご用は納まる思いは叶た」の木遣を唄い、獅子舞が行われた。



現在は、正午過ぎから子供神輿が神社を出発し、地区内を巡行した後、神社へ戻ってくる。神社への参道は石段であるため、引率する大人も補助する。この子供神輿は、西脇小学校を中心とした地元の子供によって担がれ、毎年小学校で担ぎ手を募集している。

獅子舞の前には木遣を唄い、お多福とセンマ（ひよっこ）がセンマ太鼓に合わせて舞う。太鼓が獅子太鼓に変わり、獅子が舞う。鉦や横笛も鳴らして見せ所の「腰乗り」や「せり上がり」「食事休憩」などの技を行う。お多福とセンマは獅子の口へご飯を食べさせるような格好をしたり、獅子の技の補助を行う。

かつては、この獅子舞は、その年の当番の中から最も上手な人が舞うことになっていたため、当時の花形であり、見物の人々の中から拍手と掛声がかかった。

境内での獅子舞の後、天狗、センマ、お多福、獅子、笛、太鼓という順で行列（神幸式）し、敷地内にあるお旅所に向かう。そこに生えている一本の松が3本に分かれていたため、三本松という地名で呼

ばれている。そこでも獅子舞が行われ、木遣を唄いながら神社へ戻っていく。

行列が神社に戻ると、ご用納めの木遣が声高々に唄われ、1日の行事が終了する。



動画「多聞六神社 獅子舞」



舞子六神社の秋祭り



秋祭り（秋大祭）

毎年10月8日・9日に行われており、一時期9日（宵宮）10日（本宮）の時期もあった。かつての陸渡御には太鼓を乗せた御所車や、東西2基の布団太鼓が渡御した。昭和38年頃からは交通事情から船渡御や昭和52年からはじめられた樽神輿が出た時期もあった。現在は、平成10年に復活した布団太鼓や平成19年に復活した獅子舞とともに、舞子地域内を巡行する陸渡御が行われている。

以前の陸渡御

国道を通って、御旅所の若宮神社へ行った。そのちに舞子小学校から川西へと渡御をした。大正13年ごろまで神輿は35歳〜40歳ぐらいの男の人がかいた。「チヨーサダ・ミヨシサンヤ」と唄ったという。輿丁が荒れるというので、取りやめになった。のち神輿を新しく作り、御所車に乗せて小学校4年生の男子が曳くようになった。行列は猿田彦・太刀持ち・神輿・宮司・総代・道具持ち・東西の布団太鼓の順に続いた。太鼓同士

で争うというのでお先太鼓・お供太鼓と呼んで神輿をはさんで渡御をした。

船渡御

昭和38年頃から、一時期交通事情により船渡御が行われていた。船は漁業組合が準備し、舞子の漁師が各1艘ずつ提供した。船の飾りは垂れ幕・大漁旗・六神社の旗・吹き流しである。

六神社での神事の後、当時の青年団が神輿を担ぎ、猿田彦を先頭に神輿を浜まで運ぶ。

神輿を船に乗せ、猿田彦・太刀持ち・宮司・総代・オトウの衆・青年団が続いた。神社前の浜を右回りに3階回った後、東は六角堂の付近、西は朝霧まで渡御をした。明石まで渡御をした時代もあったという。お渡りが済むと青年団と小学生以下の男女子供によって樽神輿が地区内を練った。

布団太鼓（かきだんじり）

昔は「ヤマタの祭りに行く」と怪我をする。」といわれたぐらい東西2基の太鼓合わせが激しかった

という。昭和30年代後半に焼失して以来、長年途絶えていたが、平成10年に明石の岩屋神社から譲り受けたものを全面修復して復活させた。

獅子舞

大正のころに青年が獅子舞をした。宴祭に氏子地を1軒ずつ朝から舞った。東西ともにあり、東は東の方、西は西の方をまわった。悪払いのためと祝儀をもらうため、祝儀は祭りの費用に当てられた。

決まった獅子宿があった。10月に入ると稽古をはじめた。獅子太鼓を叩き、鈴を持って舞ったという。昭和10年ぐらいまで行われていた。獅子頭を保存していた太鼓倉の火災により失われ、しばらくの間消滅していたが、平成19年に復活した。

現在の陸渡御

現在、船渡御は行われなくなりましたが、復活した獅子舞や布団太鼓が親神輿や子供神輿、子供太鼓とともに舞子の地域を巡行する。布団太鼓は国道2号線から県道

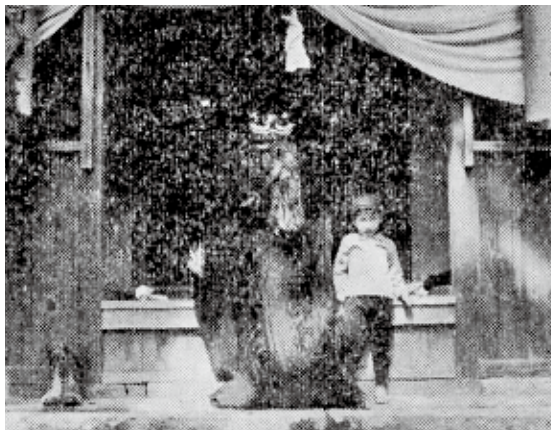
舞子多聞線に入り、鉄道の高架下を疾走する。山陽西舞子駅で神輿等と合流した後は、獅子舞を先頭に約200mの大行列となって巡行していく。お旅所である舞子小学校前で神輿、布団太鼓の差上げを行う。ここでは、舞子小学校の生徒によるよさこいも披露される。その後、布団太鼓は巡行のクライマックスとして、明石海峡大橋の袂での差し上げを最後に舞子六神社へ戻っていく。



動画「舞子六神社秋大祭」



西名若宮神社の獅子舞



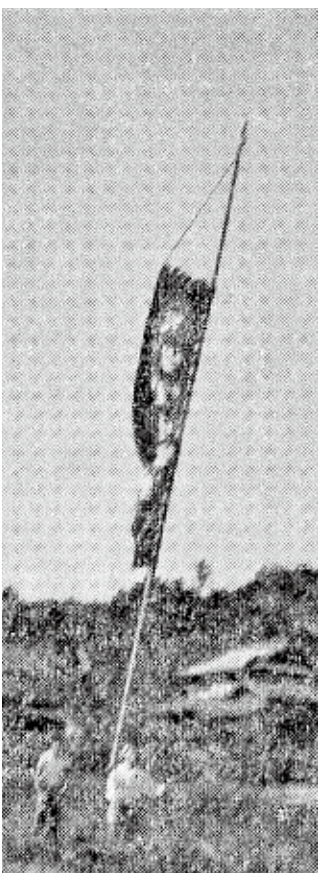
西名の獅子舞は、かつては青年団が主体となつて行われていた。平成15年に獅子と太鼓を新たに購入したことをきっかけに平成25年までの間、一時期復活したが、現在は休止している。なお、復活したのち、平成21年までは、獅子舞の保存会が担っていたが、それ以降は協議会が担っていた。

平成15年頃の秋祭りは、毎年10月の第1日曜日に行われ、第2日曜日に地区内の全戸を回り、ハナを集めていた。

若宮神社では、宮おろしと呼ばれる獅子舞の演目が舞われ、ひょうとことお多福は(あわせてセンマという)舞っている獅子の衣装をさばいたり、団扇であおいでやりながら獅子をサポートしていた。獅子舞をする前には、必ず「宮入り」を唄った。これは1人で唄い、

かつては伴奏に三味線が使われていた。

名谷ジャンクションができる前、春日さん(春日神社)は現在の垂水健康公園付近にあったが、高速道路の整備にあわせて現在の場所に移転された。かつては若宮神社から春日さん(春日神社)へお旅が行われ、幟を先頭に六角提灯や鐘、太鼓などが続き、だんじりや獅子が続いた。このだんじりは、獅子舞の囃子を受け持つ太鼓を載せて曳く。その形態は屋根が単層ではあるが、高欄様の手摺りがあったり、屋根の下には極(たるき)が使われるなど、東灘区などのだんじりに酷似した所もあった。このだんじりは、青年団がなくなり、お旅が行われなくなつてから現在も、西名会館1階の倉庫に収納されている。



ご協力者(敬称略)

- 製作協力者
- 西垂水財産区管理会の皆様
- 東垂水財産区管理会の皆様
- 東垂水北財産区管理会の皆様
- 塩屋財産区管理会の皆様
- 舞子財産区管理会の皆様
- 下畑町の皆様
- 名谷町奥畑協議会の皆様
- 名谷町中山協議会の皆様
- 名谷町西名協議会の皆様
- 多聞財産区管理会の皆様
- 海神社
- 舞子六神社
- 北川武志
- (塩屋青年会 垂水郷土芸能保存会臨時会員)

参考文献

- 神戸の民俗芸能垂水編
- 名谷誌
- 奥畑史
- 多聞のあゆみ

用語集

- お旅所：神社の祭礼(神幸祭)において神(一般には神体を乗せた神輿)が巡幸の途中で休憩または宿泊する場所、或いは神幸の目的地をさす。巡幸の道中に複数箇所設けられることもある。
- オトウ：1年間の神社の世話をする人。
- 木遣り(きやけり)：日本民謡の一種。(木遣歌)の略。本来は神社造営の神木などの建築用木材をおおせいで運ぶときの労作歌だが、その他の建築資材を運ぶとき、土突きなどの建築工事や祭の山車を引くときなどの歌も含まれる。
- 御所車：牛車の俗称。源氏車。
- コヤド：1年間の行事のお世話をする人。
- ササラ：竹や細い木などを束ねて作製される道具の一つである。洗浄器具として用いられるほか、楽器や日本の伝統的な大衆舞踊の際の装身具の一部としても用いられる。
- 猿田彦：記紀神話の神。天孫降臨に際して、その道案内をした。容貌魁偉で、鼻は高く、身長は七尺余。後世、庚申こうしん信仰や道祖神などとも結びついた。

- シトギ：水に浸した生米をつき砕いて、種々の形に固めた食物
- 神幸式：神霊の御幸が行われる神社の祭礼。多くの場合、神霊が宿った神体や依り代などを神輿に移して、氏子地域内に御幸したり、御旅所や元宮に渡御したりする。
- スリザサラ(スリザ)：鼈とも呼ばれ、日本の民族芸能で北から南まで広く用いられる体鳴楽器。
- 稚児：社寺で、祭礼・法事の行列に着かざつて参加する子供。
- 直会(なおらい)：神社に於ける祭祀の最後に、神事に参加したものと一同で神酒を戴き神饌を食する行事(共飲共食儀礼)である。
- 幣(ぬさへ)：麻・木綿帛または紙などでつくつて、神に祈る時に、供え、または祓にささげ持つもの。
- 囃子言葉(はやし言葉)：唄の掛け声の部分。唄の調子を整えたり、唄をひきたてたりするために歌詞に添えられる。
- 神酒(かみ)：神にお供える酒
- 奥丁(おくぢ)：神輿をかつぐ人。こしかき。



垂水の布団太鼓(平成29年10月発行)

【編集・発行】
垂水郷土芸能保存会
平成30年10月
神戸市広報印刷物登録 平成30年度第186号(広報印刷物規格A-1類)

【おことわり】
記事の内容・年代・日付・場所などにつきましては、誤り・漏れのないようできるだけ確認しましたが、万一誤り・漏れなどがございましたらご容赦ください。

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

UNESCO
City of Design
KOBE
United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
Member of the UNESCO Creative Cities Network since 2008

発行 平成30年10月吉日